

幻想世界クナウザス基礎事項注釈

(新暦以降・タラム梵子科学研究機関による統一見解より)

※本編は7Pより始まりませ

1、新暦までの歴史簡易年表

紀元前150億年 地球の低位次元宇宙とは振れの位置に、高次元宇宙開闢・唯一惑星誕生、半球惑星に

紀元前45億年 クナウザス世界の区域限定・混沌の渦形成、

混沌期〜紀元前二十億年 渦の内部で大多数の生物門出現、熾烈な生存競争

神話期〜紀元前十億年 (一)〜(二)までを創生紀と称す) 四大虚神に闇の虚神が虚報を流し、大戦争勃発

古生代〜紀元前数億年 (至低紀などを含む) 神話戦争停滞、代理戦争的な人種・民族同士の闘争

中世代〜紀元前数百万年 (浮島空紀などを含む) 平均化進化、共存知的生物種の台頭

近代〜新暦元年以降 低次元宇宙より入植軍来襲・クナウザスという世界名が初めて使われる

現代〜新暦六百年以降 大陸間大戦後・踏破家集団の活躍・国際交易の活発化

2、梵子という概念について

量子、靈子、といった高度な概念・素子をすら凌駕する究極の絶対完全統一理論を構築する素子が梵子である。これは、物質や情報だけでなく、行為、意義、結果、因果、あらゆるものの『中庸』状態にある素子として認識される。次元レベルが低いほど梵子は『素化』という現象を起こして互いに偏重しながら収束してしまう^{ゆえに低次元世界では蓋然性が、それさえ、非勢、非勢、非勢の強弱が、観測の無い状態を元々}が、クナウザスにおいては、高次的因果律の下、梵子があるまま空気のようにふんだんに存在するため、これを利用すれば原理的には『指先一つでどんな願いでも叶えられる』はずである。これは、いわゆる『念』をデバイスとした『梵子術』や『梵子科学』などの要素として扱われている。なお、素梵子は『固化』する前の半熟状態なら別の利用価値があり、これをもつ

て独自の召還術を行使することを『素梵子他家』と呼ぶ。

3、アナケー発祥説について

本稿などでも紹介される歴史観が確固として存在するにもかかわらず、やはり絶対的根拠のある科学的事実として、後世の多少なりとも学のあるクナウザス人は同時並列的に以下のような事実を受け入れねばならない。『クナウザスは、不測の事態によつて自壊してしまった、別のより有意義な世界の後釜として、そのブラックホールの影響に引きずられ、ほんのちよつと前(新暦1年)に、この上位世界の上に捏造された世界である』。上位世界については、エルピースという唯一究極の知的生命体が生活していたということしかわかっていないが、それに由来する出土品(羅刹手)は少なくなく、特に学説の根拠が見つかったアナケー一地方で多く産出される。

4、虚神と信仰について

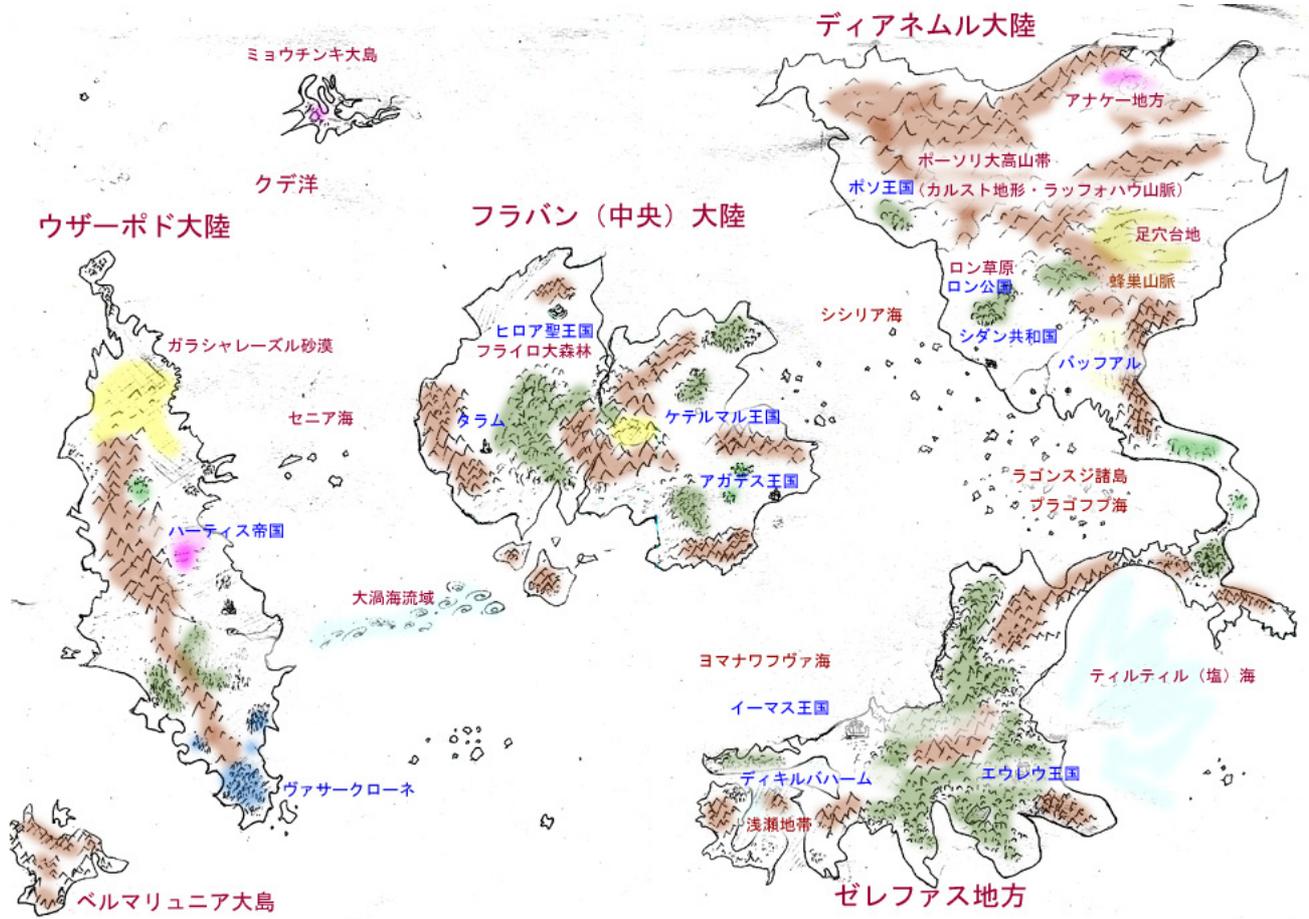
終結へと向かっていた混沌の時代に事実上の引導を渡したのが『四大虚神』の誕生である。これは素梵子化した自然概念の基礎たる『地水風化』の各々のエナギーが独自の渦を形成し、さらに同系統の力を呼び集めて生み出された、一種一固体の、無限の生命力を持った超生命体である。神のごとき力と世界に対する影響力を持ちながら、目に見えて現存する生物的存在でもあるために彼らは『虚神』と呼ばれ、生物とも神ともつかない曖昧な位置づけに属しているのである。彼らの他にも5体の虚神が発生した。虚神の影響でクナウザスは新たな機微を内在する世界へと急激に変貌を遂げていく。それに合わせ、兄弟的位置づけにある地球のような昼夜の区別や時間概念、天空を彩る星々が欲しくなった地の神を除く三神は、後付的ではあるが、これらを創世の仕上げとして付け足すべく、各々同時期に『天の虚神』を『空想』し

た(その存在は明らかだが、神の地へ種を移す際の機微を持つ)。地の神は独自に別種の子を宿し、大地を刷新する偉大な仕事を成し遂げた植物界の王

を『樹（草木）の虚神』に引き上げる。また、四散した混沌の渦の残り香が中央大陸に集結、四大虚神を始め、混沌期以降の世界を憎む『闇の虚神』となり、その反動現象として『光の虚神』も出現した。近代末期、この両神が対消滅したため、『無の虚神（最終神）』が現れる。他にもあらゆる神を区別なく一個のものとして考える『総体（相対）神』という考え方もあり、クナウザス由来でない人種の『人者種』が興した『創世主教』『命題教』^{エスベス}『魔導王教』『努力神教』などの新興宗教に連なる。現代では、世界の四大を実虚神、それ以外を非実虚神と定義しているが、各宗派はそれぞれに独自の神学を持っており、あまり学術的客観分類を気にしていないことが多い。それ以外の土着的な信仰は『河童神』などと総称される。こういった虚神の存在と梵子や素梵子の流動経路、近年の別次元への扉は密接に絡み合い、術法や信仰とも深い因果関係にある。だが、あくまでも信仰は内的な宇宙に浸透することで外的な宇宙の理に触れることであり、信じる精神の素養や状況に左右されるものであるから、教義と神々の意識や意義が必ずしも合致せず、それどころか全く無関係なことすらある。

5、共存知的生物種（共知）

クナウザスでは生物の進化が早すぎるほど早く、後期になるほど退化的進化が進む（それにともない、世界様相は大雑把な変動の断続から機微の継続的波形に喩えられるようになる）。梵子を術によって利用する人類の中で、教種類が支配ではなく世界人類共存の概念とその手法を永きに渡る闘争の中からついに獲得した。これをもって現代の区切りともいわれる。『平均化進化』はその功罪的現象であるし、遺伝的に異なる種族同士が子を得られる『授子の儀』の確立こそはその支柱である。このような高次元的世界の『日常』を覗くことは、それ以外の世界に住む者にもある程度の有意義な見聞とはならぬまでも、慰みくらいにはなることであろう。



※ クナウザス世界地図 (現代)

種族名称	5段階評価										合計		
	腕力	物理防御	対空防御	智力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術業容量		耐久値	
特徴 能力	種の保存					容姿・性質							
指者	スマー	3	2	2	3	4	3	3	3	5	3	3	34
指が多くあり、非常に器用。脚が腰の真ん中に一本だけ。足底は無感覚的で、滑るように移動するため、地形効果を受けにくい。耳が無いが、体全体で聴ける。寿命は人者(後述)と同じだが、病気に強いし老いにくい。万能で生体能力もバランスが良い。角のような構造で智力を探究できる。													
温滝期の魔族を祖先とし、世界中で様々な人種に進化した。12本指の種族が優勢となり、最近ではほとんど同一系統である。													
稼動気	ソクフルター	2	4	2	2	3	3	4	2	3	3	3	31
変形能力(極端なものは不可)。ゆえに防御力が高い。応急的に代替細胞を手当てができるので、生命力が高い。寿命は人者と同じ。訓練しにくい変形能力が著しく低下するため、一般民衆はあまり他種族と変わらない。													
単細胞生物の特質、気体生物などの無形性などが概念として引き継がれている種族。温滝時代の凶悪なウィルスなどから発生した『軍楽気』族の奇形として生まれ、狡猾さと変身能力が弱く、虐げられていた。だが、社会的種族の台頭で立場が逆転していった。【特殊生誕】性別が基本音楽や性質(これは男女の別)以外に4つあり、それぞれある時期に一定範囲に偶然でも集まると、勝手に分裂が始まる。儀式を行わなくても、これは確実に両親の性質を受け継ぐ稼動気になる。姿は相手側に近い。分裂後はばらばら魂が形成されないため、放棄してもかまわない。													
砂魚者	ザンツヒマー	4	4	2	2	3	3	3	3	3	2	4	33
砂や泥に落ちるが水泳は普通。戦士としての能力が高い。好奇心が強く、努力家が多い。食あたり強いので食事には困らない。病気に強い(カン以外)。再生能力有。寿命は70歳くらい。老いても能力値が下がりにくい。													
少し背が低いのが、がっしりした体格。平均化進化の影響を強く受けている種の一つで、最近では個体差が激しく、人そっくりのものも。髪や皮膚は髒のような感じ。													
初の脊椎動物として魚類が海から陸へ上がった功績が、クナウザスで人種として結実したのも、神話期の海洋で生まれ、能力の低い魚だったが全く得意な砂泳と犠牲を払いながらも進出し、進化を勝ち得た。その後鬼神の使者として暮らしており、数はそんなに多くないが、近年では各地に進出している。													
虫者	インセクター	3	3	2	3	3	2	3	3	2	3	3	30
顔の3つ目に遠視能力有。腕が一對多く、装備が多くできる。種は喉に隠す羽があって歌に術力を含めれる。歯はバツのような鋭い足でジャンプできる。また、乳房が3つある。寿命が長くて15年ほど(大人として覚醒してから)だが転生が容易。													
【特殊生誕】恋愛などをした際(片思いでもよい)に、稀に、その二人の性質を受け継ぐ魂が虫の卵に宿ることがある。これを古い虫の一族が回収して育てると虫者になる。転生はそのシステムを利用する。しかし、こういった【神降】の虫者は古い一族の調音力とともに近年激減している。儀式で生むと、虫が出てくるので最初は驚かもしれない(しかも凶暴な場合もある)が、段々知性もつきはじめ、数年で【脱皮】し、成人した人型になる。													
樹曼	ガオマー	2	3	3	3	4	3	3	2	2	4	4	33
植物系専門術法を多数習得可能。対植物攻撃に強い。光合成や土からの摂取で生き延びられる。寿命は100歳くらいだが、数千年など、老い一つもあつらなる長寿もありえる。老いるほど植物部位の割合が多くなる。老いを解かって自ら土に還る儀式を行う者も多い。独特の哲学を持つが、ほとんどが理や知性は高い。													
性別がないので中性的なもの(オカマではなくて、中性)も多い。かつては樹木に近い姿をしていたが、近年では平均化進化の影響で外見上は人者と区別がつかない(しかし皮膚の中は植物っぽい)者が多く、別種として分類する人類学者もある。その場合でも、植物的な部位が体のどこにかにかついている(個体による)。													
世界自然環境を変える生産者としての功績がクナウザスにおいて結実した種族。樹神には彼らの僧正中最も優秀な者が【神が転生したとして】選ばれる。【特殊生誕】自分が死んだ後に埋めたところから生えた植物(魂の種)が稀に樹曼になることがある。ただし、その性質や能力、記憶は全く連続しないオリジナルである。(付近の土壌や虫の媒介も関係するらしい。これは故人には寂しいかもしれないが、種としては遺伝的刷新ができて良いかもしれない)いずれにせよ、そこから生えた植物に成ること、それだけで土に還ると言うことが彼らにとって転生以上の確率浄土である。													
猫者	カツナー	2	2	2	3	3	2	3	5	2	3	3	30
ひたすらに素早い。しかしその他能力値に秀でるところはない。爪や牙も武器として解される。人口は多くない。ごく稀に遺伝的に突出した個体が生まれることがある。寿命は人と同じくらいだが病気に弱い。早く成人する。古い名残として歯の幼体には対の乳房があるが、これだけは平均化進化のため、成体になるに従って対に減る。													
成体になってもほとんど猫そのものの姿。幼少期は猫であり、人語を解さず、猫同士でしか喋れない(個体差があり、優秀なものは可能な場合も)。性格は独断だがあらゆる種族に受けが良い。ムードメーカーとして、なにもなく仲間に着け込んでいることも少なくない。													
平均化進化現象も何のその、元来の祖先の姿をほとんどそのまま人類種として引き継いでしまっている唯一の種族としては興味深い。この特別扱いに能力云々よりも何か別の趣向? が働いている可能性も否定できない。5億年前ほどに犬の祖先などから派生したらしいが、定かではない。													

※共存知的生物種(現代)

種族名称	5段階評価											合計	
	腕力	物理防御	対魔防御	智力	知能	念力	生命力	敏捷性	器用度	術畏容量	耐久値		
特徴・能力							容姿・性質						
種の保存・発生源													
飛竜者	ドラットナー	2	2	2	3	3	2	3	4	2	3	3	29
羽の先が手がついているだけなので武器装備は弱い、尾や脚は強い。訓練次第で飛行能力が身につく(鳥のようにはいかない)。毒の実に耐性があり、唾に温めて吐く攻撃も可能。寿命は60歳くらい。幼少期が死にやすい						始祖鳥のような容姿だが、翼があり、男らしく誠実な人格が多いため、他種族の女性に人気が高い。9割男で、女性は女王や巫女として担がれる。							
神秘的な存在である恐竜より進化したとされ、翼を持つ美しい種であり、次代の地球人類種候補であろうと思われる鳥類に敬意を表し、クナウザスに顕現した種族。【特異生殖】雌は儀式(古い集落にのみ残る)によって卵を大量に生み出し、たくさんの子を残せる。ただし、生まれるもののほとんどは鳥や翼竜であり、ペトや家畜としての価値がない。このような女性は大変だが、村では全力で生涯大事にされた上に死後も神としてあがめられる													
瘡取者	クウルストナー	5	3	3	4	3	2	3	2	2	3	5	35
体がごつごつしていて筋肉質、大柄な上に唇には智力を酸のように吐き出す汗腺があり、基礎能力値が高い。元巨人族。寿命は40くらいだが、いつまでもゆっくり成長を続ける(後期は老いと成長が同時進行する)。						多少魔物の風合いが強いが、それを格好良いと思えるなら魅力は高い。とにかく強いのでゲーム的には一人は欲しい。							
人をモデルにしたが普通の人以上に非ずという巨人族の特殊性から端を発した種族。その派生は諸説あるが、共知人種の中では一番古い血統ではないかと思われる。													
雪聖	シュネーハイル	2	2	3	4	4	4	3	3	3	3	2	33
目が中央に一つしかなく、読心術ができる。また、そちらの耳が両方とも長く、訓練次第ではかなり遠方の音を聞きつけられる。雪に埋もれても生きられる反面、暑さに弱い。接触や息で物を冷やせる。寿命は150歳、100歳以降で老いが始まる。成体になるまで時間がかかる。						小柄な人、といったところ。ちょっと不気味な感じもするが、美形が多いので悪しからず。7割は女性で、海を渡った女神に使えるカザリフィー族は飛竜者に人気があったようだ。							
幻想世界には欠かせないいわゆる統緒といった概念を引き継いでいるが、クナウザスでは兼葑子儀式より創られた人種として異彩を放つ。この発生源のために生み出した水女神の力に偏っているが、知性が高いので術法や学術なら難なくこなす。													
人者	ナー	3	2	2	2	4	4	3	3	3	3	3	32
無し。それが良かったりするのだろうか。寿命は50歳くらい(クナウザスでは回復手段も強いが病気も強い)						モデルは猿で、個体差が激しいが、平均容姿そのもの。そのおかげで他種族に違和感なく混じれたのかも知れない。この時代にはまだ存在しないが、著述の原稿が現代だと、平均容姿などの関係で引き合いに出されることが多い。							
地球の超未来。地球人類は科学力によって自然環境を破壊させたが機械の中で生き残り、仮想現実空間にユートピアを見出し、『神』となった。そして、現実の地帯を世話する物として、無機物質から実験室の中で人間と同じ人工生命体を大量に作り、『天住』として緑林のように振舞う。別次元に共時的に浮かんでいたクナウザス世界を発見した『神』は、その支配を目論み、自由を与えることを約束してこの世界を開拓させるべく、奇蹟の子『天子』を派遣、中央大陸に超巨大大重転移建造物『天を突く塔』の建設を命じる。彼らは『人住』を得るために、クナウザスの生物群と争い、和解の道を見出す(入植戦争)。——この後、『塔』は封印され、天住達は人者を名乗って住み着く。後の世界新層ではこの辺りを元年とする。													
森者	ハルガー	3	3	3	3	5	4	3	3	3	3	3	36
不老不死に近い。人口は多くても世界で数百人とされる。類稀な知性を持つ。天子は実験室版の森者というところであろう。この種は天使と天住の子として、ごく稀に発生したようだ。						人者と同じだが、美麗な個体が多い。この時代には存在しない。							
天使と呼ばれる、異次元入植軍の半機械兵士が、天住と交わって得たハイブリッド。天使には本来感情も生殖能力もなかったため、クナウザスの寛容的環境が作用したものと思われる。ちなみに、生物として子孫を残したいという欲求に魔族が付け込み、子を得たのは墮天使と呼ばれる強力な悪鬼となった。特別として、儀式を行っても森者の子を残せないのが、森者同士で交わるしかないが、そうすると遺伝的に近縁すぎる問題が、不老不死にもかかわらず、種としては滅びる運命にあるのだろう。ゆえに古い者達は閉じこもりがち。													

月兎の裏側

ゆにあ

「ちよつと待て。本当にこつちでいいのか？ 正直にいうべきだ。敵ならともかく、仲間を裏切るようなら、てめえなんざ……」三本も剣やら斧やらの武器を体にくくり付けた大柄の白黒ブチ猫が、地図を眺めて気まずそうに立ち尽くしている巨人を罵倒している。ここが、資源も多いが問題も多いためにすぐ近くにもかかわらず聖王国領土外とされている『遺跡群』の敷地内であることは間違いないが、その詳細な位置情報についてまではあえて示さないでおこう。文頭の短い発言だけで我々は彼等が——『蕃咲き誇る頃』という名の踏破家団である——その中で迷子になっている事に気づかずにはいられないからだ。

『裏切得る』なんて、とんでもないんです。いや、ワタシハ、メットさん、ゴメンナサイ！

言い間違いをしていることから推察できるが、瘤取人種の僧侶ラクーン・ベロニは後語（唯一種異世から帰込んだ奴隷を互以前言語での動察合むこと、世界非語に於つてある）を漸う使えるようになったばかりであつて、謝罪の言葉は後半から使い慣れた古期語系に変わっていた。それをきつかけとして小柄なメット・ジンガード・ガロツサも同じ言葉に戻つて萎縮する大男を散々に罵つた。

「やめてよね。ラクーンなんかには地図を渡したリーダーの判断が不味かつたんじゃないの。責任の所在つてのものとはつきりできないの、ホントにばか猫」

こういつて、一挙に3人全ての仲間を『口撃』したことにも気づかないのは、虫者の術士キルビール・サツカリだ。彼女はしかも、自分がある分かれ道で、さっぱり現地につかないことに苛立つて、地図を持つ瘤取者の指図とは逆の道筋を行く提案をパーティに受け入れさせて現在の位置に導く手助けをしたことすら、念頭にない。彼女が人を貶すとき、それはほとんど愛くるしい小悪魔といった様子で、二対の腕を絡ませるようにして、美人ではないが赤い木の実のような愛嬌のある顔に指を押し付けるのであつた。

リーダーは片手の指が二十本もあるカサヅロ族出身のコマンズルディアン・ヒーコンケで、彼にはそういうキルビールの愚かしいところが良くわかっていたゆえに、腹を立てる代わりにため息を一つつくだけにした。すでに壮年期を越えかかっている彼だが、昔は一

一般的な職業——ラストールの中心街から少し離れたところにある、悪名高い『血液銀行』でサラリーマンをやっていた——についていたため、若い仲間達と大差ない、お世辞にも相応とはいえない実力と経験しかもっていないから、別に年長扱いもされず、もっぱら仲間には『コマ』と呼ばれている。

コマンゾルディアンは四人で構成される『蓄咲き誇る頃』にチームワークという重要な要素が欠けていることを日々悩み、鈍重でこの家業に必要ななんたるかに特に欠乏しているラクーンを鍛える意味で彼に地図を任せただのであるが、これほど細かい地図で迷うなど、夢にも思っていないかった。少なくとも、簡単に出発点に戻ることはできるはずであったし、今のように完膚なきまでに現在位置がわからなくなるなど、悪い冗談にも等しかった。当然のことながら、彼自身も感じていたように、このパーティに欠けているもののもう一つとしてリーダーの判断力を上げられるようになったことがその成果といえるなら、虫者女の悪口も厳肅に受け止めなければならない。

——遺跡群座標 G-14-5 『月児の裏側』

探索し、『上位種メンテナンス室（仮称）』までの道のりを確保せよ

依頼者：カイ・ザード

報酬：7800——

この依頼を引き受けることを躊躇なく提案したのは、老いてより少年期の夢に安息を奪われた彼自身である。報酬の高額なところから、かえって手を引つ込めて様子を伺っていたほかのパーティに先んじて、いわば周囲からすればその偵察兵として、『蓄咲き誇る頃』は出陣していった。ある中クラスの踏破家などは、はつきりと、『蓄咲き誇る頃』が帰ってくることはないことを予測し、彼等の足跡から仕事の難易度を推察し、自分の成功のために利用しようと考えていたほどである。

これを狡猾で残忍だと思つてはならない。一度受けた仕事を成功させるか否かはその意味以上に重要で、自分たちの名声とそれのもたらすさらなる成功への効果を含んでいるから、この家業が生易しくない競争的なものである以上仕方のないことであるし、そのような『読み』も、この家業の妙味であり、必要な能力なのである。コマンゾルディアン・ヒーコンケにそのような読みがなかったわけではないが、『上位種メンテナンス室』という単語が、人者植民に強い興味を持つ彼の心をひきつけた。昨今では指者種のライバル的存在となった人者種であるが、彼の場合、一般的な、批判的、悲観的な興味ではなく、純粋

な知識欲であり、外国人が国民よりもその国に詳しくかつたりするようなことに近い。

ところで、老いた指者が考え込んでいる背中越しを舞台に猫と虫がつかみ合いの喧嘩をするという光景は、今まさにそうであるように、危険の潜む野外であろうと遺跡内であろうと、所かまわず見ることができるといえる。こういう連中が今のところ、依頼の出ている居処屋（隠家のための）
後を照らす店『泡沫の園』の常連でもある、名称不明の病に命を脅かされつつある一青年の命運を握っているということになりそうである。というのは、彼を治し得る唯一の場所に行き着くために、その身内が今回の依頼を出したからである。しかしもちろん、仕事に必要な客の依頼理由をまで細かく聞くほどこの四人は野暮でなかったから、そこまで深くは関係性を有していない。

けれども、だからといって都合よく物事が進んでくれるわけでもない。日が落ちかけ、彼等は3つの崩れかけた遺跡に囲まれた空き地に野営することにした。下手をするとかかなり奥まったところに入り込んでいる可能性があり、依頼達成期限——依頼者は急いでいるので、決して長いものではない——なども気になるところではあるけれども、こだわって救いようのない状況に追い込まれるよりはましなので、翌日探索しても目的地にいきつけない場合は、一度遺跡群から直線的に外に出て、最初からやり直すことも考慮に入れなければならないだろう。無論、遺跡群自体が超巨大な一つの遺跡のようなものであるし、この広大な区域を自由に闊歩したり、各遺跡をア・パートのようにして、夜な夜な這い出してくるような、あまり出会いたくない連中も決して少なくはないので、実は言うほど容易いことでもないのだが。

和虫の甲殻と骨鳥で組まれた簡易パラソル型テントの下、コマンゾルディアンは相変わらずあれこれと悩んでいたのだが、他の3人はいがみ合いを忘れて焚き火の明かりを頼りにカードで成功報酬の取り分を何割か賭けの対象にしている。だが、その平穏も、メット・ジンガード・ガロッサが三連勝したところで、キルビールの複眼能力が猫者の暗闇を利用したイカサマを看破し、喧嘩騒動となつてすぐに消されてしまった。そうやって危険も踏破活動の鉄則も何のその、無駄に体力を消耗し、二人は子供のように眠るのであった。

ラクーンとコマンゾルディアンが交代で睡眠を取ったが、幸運にも、その夜は何事もなかった。もう一つ不幸中の幸いであるが、翌日の夕方までかかったものの、なん

とか一行は、斜めに2階建ての下半分が埋没している目的の遺跡にたどり着くことができた。それは、店から渡された地図に書かれていた特殊な紋様——奴隷語の数字等で、部屋番号のようなものらしい——によって、ほぼ断定することができる。

高レベルの踏破家団、例えば『純なる甲羅』『海流の國の店屋自らリターゲルを努める。』の近辺は初心畜産として誰れの存在もある。』が用いるような、持主にだけ視界を広げる虚品キヨシナ（キヨシナ、梵字術の力を内任した不可思議の品物を指す）など誰でも所有できるものではないから、彼等は、どのような世界であろうとそれに頼ることが許されるであろう原始的な照明器具を用いざるを得ない。それでも、鍵の壊れた金属製の扉を押し開けて仲間を先に行かせ、ラクーン・ペロニが後列から長身を活かして上から照らしたので明度は十分といえた。

大きな入り口と受付室か応接間のようなカウンターを持つ施設から先に進むと通路が急に狭くなりはじめた。背の低いメットでもジャンプすれば天井に手が届くほどの高さになると、今や長所が短所となった瘤取僧の松明が天板を焼き、煤を落としてキルビールの不興を買う。建物内はひっそりとしていて、この遺跡が中核的な部分を除いては何度も先人に探索されているという前情報を支持したが、それゆえに突発的な、予想外の新たな危険が潜んでいるような雰囲気が一行を重く包む。

こんなとき、ビンブルデー戦争（悪寒族が人者を騙し、稼働競争をせしめる内戦。だが、これが悪寒族の衰亡を早める種となった）で使われていた、廃屋となった軍人病院で肝試しをしたときのことを、コマンゾルディアン・ヒーコンケは思い出す。あの少年時代の体験、暖かな家の中、親の庇護の下で真面目に勉強していれば出会うはずのなかった危険と特殊な心の動きを。コマ少年はそのとき幽霊を目撃することはただの一度もなかったが、代わりに、ちようど、今曲がろうとするような角の手前まで来たときに、全く別の脅威、5つの眼球をぎらつかせる蜂男、虫者のなりそこないのような怪物に出会った。

彼は学校では優等生で、その後も有名商社や銀行で平凡な、堅実な生活を送ってきたのに、どこかでいつも、何か全く別の興奮を求めようなどころがあった。それを自分に偽って、小さな幸せを護るために暮らしてきた。少年であった彼が捕食者に出会ったときなどは、恐怖と逡巡の中にも、激しい胸の動悸に喜びの陶酔を感じた気さえするのだ。——もっと早くこの生活に入るべきだったのかも知れぬが、少々老いたとはいえ、あの肝試しの頃と気持ちそのものは何も変わってはいないのだ、とコマン

ゾルディアン・ヒーコンケは自分に言い聞かせた。

さあ、今度もあの角から何かが飛び出してくるかも知れぬ。今度は一体どんな脅威か、そして、自分はその時のように窮地を脱することができるのであるうか…？

彼の悪い癖である。時として彼は、ある極端な生活の変革を行った人でありがちなように、自己の内面にわけもわからずに踏み込みすぎる。彼にはその素養がありすぎても、すでに子供時代のように柔軟でもないし、かといって経験も薄いのである。ずんずんと一人で先行し、足元の床穴から煙が噴出したことにも全く気づいていない様子だった。猫が敵に飛び掛るような勢いで彼を突き飛ばさなかったら、それを吸い込んでしまっていたに違いない。

コマンゾルディアンは仲間による不意の強襲を不明に怒ったりせず、すぐに状況を、自分の失態を理解した。青白い煙は通路を被い始めたが、ある一定のところまで流れると何らかの仕掛けで、それ以上は拡散しなかった。素早く身を護った他の仲間とともに、コマンゾルディアンはそれを呆然と見守った。仲間の叱責と罵倒にはいつも以上に謙虚に謝罪しながら。

どうしても、遺跡の罠にはその危険性だけでなく、造型として、防衛装置としての見事さに心を奪われてしまう。あえて何のガスなのか吸ってみる気にはどうしてもなれなかったが、気体が収まると、コマンゾルディアンは罠などの構造に詳しいメットの許しを得て、その仕掛けを念入りに調べ、一本の太い足で彼の踏みつけた床パネルの裏にある機械構造を眺め、ワツタルンの古本市で購入した表紙の破けた黄色い本の後半に書かれた罠の絵と比較検討し、盛んにメモを取った。調査には彼の多指が役に立つことは言うまでもない。

内部のもっと深遠な場所に到達するために忙しい彼等が、こんな、遺跡内においてはさして珍しくもない、通り過ぎるだけにすべき構造物に興味をひかれてしまうということは全くの異例といえるし、鈍重なラクーンならともかく、あの悪態好きの二人がそれを腹ただしげながらも黙って終るのを待っていること自体が、彼等の関係を知らぬ者には不思議なことと感じられることであろう。

仲間たちは薄々ながらも、自分たちをこれまでの決して少ないとはいえない成功に導いてきたものが、この男の素人ゆえの業界常識を破る発想と、生まれつきの社会的

優等生性質によつて平凡な生活に縛られることを余儀なくされた彼が老年になつてようやく手に入れた、自由を食ふような衝動から来る大変な勤勉に依るところが多いということに認めざるを得なくなつてきているし、それゆえにコマンゾルディアンは踏破家としての無能振りを發揮しながらも、『蕾咲き誇る頃』のリーダーとして置かれていたのである。

指者はぼろの本を大事そうに閉じて袋に納めた。ページには多くの見聞が、彼にとつては必要な事項だが、普通の踏破家に見せたら笑われてしまうような当たり前の、漠然とわかりそうなことが書いてあるのだろう。だから彼が、とある凡庸の機械構造、例えば巨大な針が壁から突き出して訪問者を串刺しにするようなものについて熱っぽく突っ込んだ話をするとき、自分の経験を鼻にかける玄人が気分を害して、彼を罵ることさえあった。

例えば『泡沫の園』の『語りかける楡』の近く、十六番テーブルで相席した砂魚者の斥候などがそうである。彼は生まれつきの不器用を努力で克服したという自負心を持つており、コマンゾルディアン・ヒーコンケの細々した知識や問いかけを全く無用の興味として片付けた。コマンゾルディアンはそれについて憤慨したが、理解を得たくて話をしたわけではなかったから、彼と話すのをすぐにやめた。

同時に、彼は自分が素人でくだらないことに没頭してしまふと思つて俯いてしまつたが、実際には、相手の男はこの素人的な老人の、ある一つの物事に対する理解の深さについていけなくなり、自負心を傷つけられたことに報復しただけのことである。事実、コマンゾルディアンは一度理解し、洞察した危険について2度と同じ手は食わなかつたし、時としてはその趣向を自分の策に利用しさえした。そのようなとき、この家業の性質だけでなく、種族的寿命という点においてもそう永く続くとは保証できそうにもない彼の人生が今の際に燦然と輝いていることを、肺と同様で左右胸部に二つ在る彼の心臓どちらも喜びに震えて立証した――

4人は通路を道なりに進み、鉄格子のドアを見つけた。無理にこじあけようとする和電流でも流れるのであろう、向かいの壁には小さな鉄箱が取り付けられ、液晶盤に奴隷語系の記号が明滅している。コマンゾルディアンは銀行員時代に古い品を扱う業者等に融資するようなことの多い部署にいたから、持ち前の勤勉さを活かして必要以

上にこういった言語に精通していた。今思えばそれは別の、まさに今のような場合を無意識に見越してのことだったのかもしれない。

合言葉は打ち込むタイプのものだと理解できたので、コマンゾルディアンは液晶のような部分を指でなぞって、慎重に依頼者から教えられた合言葉の文字を書いていった。指で押した部分が虹色に光り、次の文字が書かれるまで蠢く。全て書き込み終わったところで、彼は、ようし、と満足げに声を上げた。だが、扉はうんとすんとも言わなかった。

「何か足りんのか、ここではないのか……」と腕組む彼にすかさず、「そもそもやり方が違っんじゃないか?」「ちよつと、ここまで来て、ちゃんとしてよね」と、二人の野次が飛ぶ。そんなことは言われずともわかっている、コマンゾルディアン・ヒーコンケは何度も、考えつく限りの方法で試行したが、やはりだめだった。彼は何事も起こらないことに苛立ち、だんだん大胆になってきて、装置を殴りつけるのも一度や二度でなくなってきた。ラクーンの提案で一行は一度ここを離れ、他の探索をすることにした。

結局、教えられてきた合言葉を使うべきところは全く別の、ここからかなり離れた地点の広いフロア、三角錐型の天井の中心下にぼつんと立つ、遺跡群の金属的な風格にはそぐわない、とつてつけたような破風屋根と石造りの小屋の前であった。彼等は全くここが目的地だとは思わなかったし、リーダーも開かない引戸をすぐにあきらめて鍵を探すことを提案したのだ。そんなことはお構い無しに、キルビール・サツカリは合言葉の発音をどんなところにも面白がって投げかけていたのだが、この地点に来て、それが思いもよらず効を奏してしまったのである。彼等は何か別の仕掛けかと思つて躊躇し、それから事態に気づくと、功労者は偶然を實力にすりかえて自慢し、老いた指者の徒勞と比較した。

こうしてようやくやくではあるが、彼等は今回の仕事における目標地の、スタート地点に降り立った。小屋の左隅の床がくりぬかれ、階下に繋がる梯子がかけられている。踏破家達は慎重かつ大胆に、自らの勘と経験、實力と運が命じる限り、先へ先へと進んでいく。なぜなら彼等は、時と場を問わず、自らの前方を決め、踏破しつづけるこ

とを生業とする者達であるのだから。

だが、それは自分勝手という意味を指さない。自由であれば悪も許される、となれば、結局は自分の本能や欲望に根負けしていることになりはしないか。この職業の名称がどのような起源を持つのかは諸説あり、膨大な数の論文をランテニウス寺院の蔵書中に見出すことができるが、その論議には基本的な共通項がある——すなわち、踏破、という言葉は、単に遺跡の財宝や山の頂上などといった目標を得るための直線的な道筋を完結することではなく、人生の場面場面でその都度自分らしくあり、社会の拘束から自由で、かつ悪の拘束からも自由な人、そうあるうとして生きようとすること、結末ではなく、あくまでその過程を意味する、というのである。このような分類法では、自分では踏破家だと思っていないがほとんど踏破家と同じ生き方をしている者や、踏破家だと名乗りながら実質はそれに相応しくない者も少なくなくなる。

彼等の前方は彼等が決める。時としてそれは挫折であり、道に迷ったり逃げ出したりにすること、つまり一般的な意味での後退も、彼等の『前進』となりうる。同様に、迷路のようにねじくられてこんがらがった道筋が、彼等の直線になり得る。調子の良いときは跳躍するように、時空の定めを踏み越えて生きていく。

そして彼等にとつての結末とは無限に続くかのように見える分岐における一つの可能性、その顕現でしかない。彼等の物語は人生の原初状態、純粹結晶、一片の詩となり、それは栄枯盛衰を超えた終わりも始めもない永遠の勝利のファンファーレを奏でることだろう。そして我々は今、踏破家『達』という曖昧な括りの母集団から様々な理由と偶然性をもっていくつかのパーティとその話題を抽出し、重ね合わせていくことで、その遙かなる響きの片鱗を安炙り出していくのである。——ところで、このような理由のためにも物語を簡潔にしたいところでもあるが、他方また一つより二つ、一次元より複次元の方が事例としても相応しかろうとも思われるために、『蕾咲き誇る頃』を主要として物語るのを、今回は少し急がせていた。彼等が成功すれば、少なくとも現世からお暇しない限りは、きっとまた会えるであろうから。

我々が目を離れた隙に、さらに3日と4分の1日が過ぎ、あの混合種族の四人は、地下五階まで歩を進めている。正確には地下といっても、ごくあっさりとい異世界の超技術が完成させてしまったバベルの塔のごとき建造物の、地上数千階のうちの何階か、

である。いずれにせよ、彼等の予想を遙かに越えてこの遺跡は深く、様々な仕掛けがコマンゾルディアンに興味を刺激したが、それだけであって、収穫は少なく、どこからともなく湧いてくる機鬼などのガーディアンは久々の来客に嬉々とするのに反比例し、踏破家達はどんどん消耗していった。こいつらときたら、安全圏と思われるような、踏破して締め切った部屋にもどこからともなく入り込み、なけなしの休息をもたらすキャンプを邪魔するのだからたまらない。

ただ、今度は帰り道をしっかりと据えてきてあるので、外に出て、拠点に帰り、補給をしてまた戻ってくれば……いやいや、そうはいかない。もう依頼達成起源が迫ってきている。また時間の大幅なロスがあれば、彼等の名声と懐は痛く傷つけられてしまうのだ。それでも命あつての物種……と反駁する声は、少なくともこの4人の中からは一度も出なかった。彼等はそういった面では奇妙に共通していて、不協和音を響かせるチームワークの中にも、やはりどこか、仕事仲間として集まった理由を感じさせる。

彼等はもう冗談をいう余裕もなくなつてはいたが、黙々と、自分を、自分たちを信じて、先へ進んだ。その結果、彼等は『月兎の裏側』に入つてより6日目にしてようやく、壁にくりぬかれた部分にはまつている円形の扉——手を触れると一定時間扉が消失した——の向こう側の部屋で、透明な硝子製の棺桶のごときものを見出すことができた。周囲の壁には埃にまみれてはいるがまだ十分に稼動しそうな様々の理解不能な機材が並び、中央の台座にチューブが連結され、そのようなものどこであるうと、小さなスイッチやレバーが所狭しと散りばめられている。

「感嘆すべし、です。おそらくこの部屋は、我々の目的地ではあるようですが——この全体、かつて『天を突く塔』が爆破したとき、半ば意図的に別々の施設として切り離された、我々の踏破してきた偉大な建造物にとっては、単なる補足的な機能を持つた部屋ではないのでしょうか。見て御覧なさい、きつと動きますよ」

棺桶の中幅から伸びる金属板に操作盤のようなものが乗っていて、コマンゾルディアンはそれぞれの何かを押そうとした。「やめておけよ！」メット・ジンガード・ガロッサが爪を見せて制した。成功で有頂天になった指者は肩をすくめて笑った。

「怖いことはないんですよ。この機材は無人医院のようなもので、恐らく身分の高い

奴隸の専用であつて、彼等はこの棺桶の中に入っているだけで病氣や怪我を検出し、治してもらえたのでしょうか」

「あんたの推測はご立派だ。銀行員からなら、学者か作家にでもなつたらいい。だが、俺はプロの踏破家だ。目的は果たした。後は無傷で、いじらず、こいつを依頼者に手渡すのが筋つてもんだ。それで、本当に金がもらえることになる」

はたと、コマンゾルディアン・ヒーコンケは猫者の、この種族にしては随分細すぎる目を凝視した。とたんに、彼は自分の顔皺が気になつてうつむき、この部屋の薄暗いことに感謝した。

「帰ろう。いいよな、コマ」ラクーンが彼の肩に手を置く。

彼等のもと来た道を戻りはじめた。

「くそ爺イ。」

せつかく成功したのに暗くなつた雰囲気で機嫌を損ねた虫の女が眩き、しかもなぜか二本の右腕で猫の背中を思いつきり叩いたので、同じく口をへの字にしていたメツトはよろけ、決まりきつたような気がみ合いが始まつた。言いすぎだよ、あんた、という彼女なりの叱咤である。悪態にも最低限のルールがあるのだ。高いプライドが邪魔して何のフオローもできなかつた猫者も、それを気にしていたから、彼はそれを喧嘩で解消し、ごまかす機会を与えられたことを喜んだ。

そのような心の機微が通じる四人だつた。コマンゾルディアンはいがみ合いを見てため息をつきながら、世の言い習わしに反して、幸福を一つ得たように感じていた。

しかし一人だけ、ラクーン・ベロニだけが落ち着かない目を周囲に這わせていた。彼は鈍重であり、自分でもそれを知りすぎるほど知っていたがゆえに、ただ帰るという時分になつてもまだ緊張しつづけていた。無論、踏破家の端くれならいつであるうとそうすべきなのであるが、『蕾咲き誇る頃』は少々基本に対していい加減なところがある。

今回のことは良い薬になるだろうか。それとも、もう手遅れで、彼等に早速、物語の無慈悲による引導を渡すのであろうか。本来ならば動物的勘に斥候技術と経験を重ね合わせたチームのリーダー、メット・ジンガード・ガロツサが気づくべきであつたのだ。彼ならば、もっと危険が遠くにあるときにそれを検出し、それで助かるかどうか

かは別としても、しかるべき対応を検討できたであろうに、生憎と彼は心を別のことに囚われていて、結局、危機を知らせる大声を上げたのは癡取者であった。それが遅すぎたとしても、ラクーンを責めることなど無論のことながらお門違いであることは注意しておかねばなるまい。

「二人多い…だ、誰だこいつはっ！」

巨人の僧侶は、4人全員が無事であった喜びをようやく実感としてかみ締め、そつと心の中で祝杯を上げる練習をしたときに、頭数を意識して、異常に気づいたのである。メットとコマンゾルディアンの後ろに、喧嘩の擦り傷を舐めて赤い目を腫らしているキルビル・サツカリがとぼとぼとついてきているのだが、そのちょうど中間に、もう一人、誰かが何食わぬ顔で歩いている。全く気づかなかったが、このように少しずつ、複数の人間に気づかれずに集団に交じるといふ芸当ができるなど、尋常な相手とは考えにくい。機鬼のように湧いたのであろうか。

我に返るように、仕事モードにかえて神経を研ぎ澄まし、3人同時に、この異様な存在を認識した。気づかれた方の反応はそれよりはるかに早い。全く間抜けな奴等だ、やれやれ、といったところであろう。この謎の存在は、彼等を観察し、見定め、値踏みしていたのだ。そして、自分一人だけでも複数を、いたぶって殺せると判断を下したばかりであった。

人型の怪物が判らない言葉で叫び、裂けた口からドリルのような触手を、舌で飛ぶ虫を絡みとる爬虫類のように吐き出した。標的のメットは完全に反応が遅れていたが、この生物の姿を見て毛が逆立つような思いに駆り立てられたコマは、一瞬早く、その間に割って入った。だからといってどうなるというわけでもなく、標的の種類が変わっただけのこと。

六十年以上も生きてきたが、コマンゾルディアン・ヒーコンケは内臓を破られた感触を生まれて初めて体験した。不思議と痛くない、と彼は感じたが、それは彼の考えるような各種の異例的な理由ではなく、単純に、触手に含まれる強力な麻痺毒のせいであった。指者の老人は石のようになって倒れ伏し、痙攣した。目は次々と成すすべなく傷ついていく仲間達に注がれたままである。

「いつのまにいやがった、この野郎！」

メットの悪態も、投げつけた手持ちの斧も、その後の二刀流も、全く掠りすらしない。術を唱えようとしたキルビールはその寸前で、あの触手で真つ先に仕留められた。ぴくりとも動かない。虫者は致命傷を受けても体全体の細胞に協力させてしばらく存命を図ろうとするらしいが、それも、しかるべき救援がこなければ無駄な延命治療と同じである。

メットとラクーンは必死に攻撃した。けばけばしい黄色と黒と緑の縞模様警戒色に彩られた怪物は、彼等二人には口の触手を全く使わず、腕の鎌だけで応戦した。弄んでいることは明白であった。この二人が、キルビールのように、自分を万が一にも脅かすかもしれない攻撃系の術を使わないことを読みきったからである。

通常の攻撃で奴を倒すのは難しい、特に我々の水準では、とコマンゾルディアンには戦慄しながらもはつきりと断言できた。それを裏打ちするものは、彼の、時として批判の対象になる偏った知識だけではない。彼はこの時、運命というものをはつきりと感じていた。今まさに自分たちを死に追いやるという怪物の実物を彼は過去に見ているだけでなく、それによって殺されかけた経験すらあるのである。

彼がこの遺跡に入る前にも思い出した、忘れられぬ思い出の中の登場人物——蜂者とか蟻螂者とか呼ばれることを後に彼は文献で知ったが、虫者と派生を同じくして非常に好戦的で非社会的なこの生物種は知的共存可能主用種族に『怪物』と分類される部類であつて、特に、彼が廢屋で出会つた蜂者系は比較的その下位に属するし、目の前にいる蟻螂者系は、毒を伴う触手射出能力だけでなく、相手の心の間隙を縫う梵子能力や高い知性、驚異的な透視読心術——虫者の複眼能力と同じようなもので、それゆえにキルビールは狙われたし、メットの攻撃が全て読まれてしまつたのである——しかも、それが上位種で、出会えば間違いなく大変強力な敵となることは自明である。仲間によこれらの知識を伝え、少しでも援護したくとも、コマンゾルディアンの唇は震わせることすらできなかつた。目元にも毒がまわってきたのか、出血多量のせいなのか、視界がぼやけ始め、彼は夢うつつになり始めた。

おおよそ、最期に来て、彼の人生、彼の冒険というものは、総合点ではそれほど高くはないかもしれないが、それでも、楽しく満足がいくものであつた、と彼は『少年』に自負した。少年、とは、彼の脳裏に突然出てきた存在で、よく見ると幼い頃の彼自

身であつて、老人は彼に誘われるままに、あの心臓を躍動させる秘密の施設へと意気揚々と出かけていった。

それは幾度か夢に見ているのに、覚えてしまうと一切を忘れてしまうような光景であつた。ああ、その角を曲がってはならぬ、と彼は少年に叫ぶのであるが、子供時代の彼はまんまと怖い男に出くわし、コマンゾルディアンをすり抜けて走り去っていく。彼は追い、少年が追い詰められている場面を見た。「己はここで、奴の一瞬の隙を突いて逃げ出したのだ」と彼は思った。それは単なる幸運であつて、運不運というものもは人生の中でどれだけ重要なものか、とりわけ、踏破家業ではそのウェイトが全く真剣なものとなつてしまう——などといった常識に彼も染まっていたし、今でもそう信じて疑つてはいない。

壁を背にして少年は頭を抱え、泣き叫んでいる。既に何度か、攻撃を加えられているのだ。彼の短いズボンを壁際の床に溜まつた水が塗らしているが、その不快感を感じる余裕などありはしなかつた。今、コマンゾルディアンのいる角度からはそういう細部が良く見える。あれは昨日雨が降つたからだ、と彼は思った。

あたりは薄暗く、間違ひなく夜のはずであつた。少年がついに止めを刺されようとしている。肩を掴まれ、頭から丸かじりにされようというところだ。それはちようど、彼の背後から、朝日が昇つてこようというときであつた。逃げ回っているうちに夜が明けてしまつたのだ。朝日のさわやかで鋭い、世間になれたものには少々まぶしい光が、床の水溜りを煌かせる。

ここで、あつ、とコマンゾルディアンは声を上げた。蜂男が反射光に目を刺し貫かれて、のけぞり、手で目を被つて悶絶してゐるではないか。少年はこの隙に駆け出し、舞台から消えたが、観察者は去る者にも悶える蜂男にもかまわず舞台へ駆け寄り、陽光を反射した救いの水を掬い上げ、ありつたけの声で叫んだ。「キルビール、光だ。かまわんから、光の攻撃術法を私にくれ！」

信じ難いほどの胆力で上半身を起こした老人は、すでに『月兎の裏側』の地下5階に舞い戻つていたし、叫び声は、その中に確かに響いていた。仕留めたはずの男の挙動に、力尽きたメットを食らおうとしていた蠅螂男が注目する。怪物はメットを捨て、留めを刺そうと、しかし、決して油断せずに回り込むように指者に近づいていった。

意志の力で毒に打ち勝ったコマンゾルディアン・ヒーコンケは、運命の定めには決然と相対し、怯まずにこれを睨みつけた。もう彼は人生から逃げないと誓い、踏破家業に入ったのである。己は素人かもしれないが、心は君たちと一緒だ、と彼は心の中で仲間達に語りかけた。そして、リーダーの無言の意志を受け取れないものは、3人中に一人もいなかった。

彼のパフオーマンズは怪物を釘付けにし、密かに数刻前から息を吹き返し、チャンスを狙っていた術者が倒れ付した体の下で、位置的に目立ち難い下腕を使って法印を組みながら術を完成させている事態に気づくのが遅くなった。怪物が本当に倒すべき相手をキルビールに切り替えた瞬間、彼女は最後の力を振り絞って『光渦板』を放った。

残念ながら狙いは全くそれ、味方の方に飛んでいく。怪物は無駄なあがきをせせら笑った。光神の一方的な強すぎる正義感を髣髴とさせるような、圧縮された光子の一般分子運動に対する強制感化反応が、標的に衝突した部分、この場合は老人の左腕でスパークし、破壊作用をもたらした。螻蛄男は、自分を一瞬でも凍りつかせた生意気で間抜けな男を先に八つ裂きにしてやろうと、術者から背後の男に向きを再び直した。

ところが標的は怪物の予想に反し、驚いても恐怖してもおらず、相変わらず決然としていて、撃たれた腕も高く掲げたままである。その手にはさつきまで、二十本の指に絡まれて、鏡が握られていた。手先の器用な彼は、種族的にどうしても小手先技を不得意としてしまう制約を持つメットの代わりに盗賊のような仕事をしなければならぬときがあつて、そんなときのために、様々な小道具を持ち歩いている。手鏡もその一つで、別に、変わったところのあるものではない。現に、術の作用と衝撃で粉々に砕け、彼の手をさらに傷つけ、床を鳴らしたのである。

だが、術の構成分子となつている光子が、砕ける前とその後鏡に弾かれ、乱反射し、捕食者の見えすぎる複眼を複雑な信号を持つて刺激した。果たして、怪物は一瞬、何事もないように頭を振っただけだったが——しかしすぐにたまたらず、発狂したような叫びを上げて頭を抱え、コマンゾルディアンからよろよろと離れていった。

「メット!」リーダーが叫ぶ。「言われなくなつてなあ……!」猫戦士はよろけながらも、毒を食っていなかったために確かな動きで床の戦斧を両腕でとると、それを怪物の無

防備な頭上に渾身の力で振り下ろした。そう、毒は盛っておくべきであったのに——怪物であろうと人であろうと、生物とは、油断をすることで有益な処理をしているのではないかと錯覚してしまいそうなほどに、どうしてもそれを防げないものであるらしい。

怪物はさすがに一撃では倒れなかったが、もはや動揺して相手の心を読むどころではなかったし、この能力に頼りきっていたためにそれがなくなると目くら同然であったから、ラクーンが加わるとたまらず逃げ出そうとした。メットの疾風のごとき足がそれを許すはずもなく、螻蛄男はここで終らせるはずの者たちに一生を終らせられた。

——探索依頼達成期限二日前。すでに、高額報酬に涎をたらし、情報集めを万全としたいくつかの団体がこの依頼を引き受ける旨を店主に伝えていたし、依頼者達も『蕾咲き誇る頃』の生還を半分絶望視し始めていたのだが、無論のことながら、彼らは還ってきた。4人はふらふらで、一瞬、壮絶な経過を連想させたが、実のところは他愛ない理由であった。

成功で気を良くした彼らは、特にあれほど依頼の期限などを気にしていたプロ志向とやらのメット・ジンガード・ガロツサが率先して、立ち寄る街ごとに宴会を開き、面白おかしくゆつくりと旅をして帰ってきたのである。「いやあどうも長らくお待ちさせてすびばせんねえ…… ははは、いやいや、強い怪物がいたものでしてね。これが、例の部屋までの地図でして…… へへへ、お受け取りください」あの額に謹厳な皺を刻んでいる老人ですら、神経を緩慢にさせる毒素によってこの調子である。まだ若い居処屋の店主が多少つつけんどんに報酬の金袋を手渡したのも、無理からぬことであるう。

それでも、彼らとしばし時をともにした我々は、彼らにささやかな祝福の意味をこめて、お帰り、と声をかけてやりたくなくなるといふものである。彼らは『泡沫の園』にきて、今回に関わる最後の、ゆえにより盛大に、周囲を巻き込んだ宴会を開催した。その大きくされたり半ば忘れられている自慢や苦労話に、人々の好奇心が集まる。——開けられなかった格子扉の奥には何があったのか？——踏破にはその都度の目的が

あつて、それを達成することは、全ての謎の解明を意味せず、むしろそれを意味深くすることもままにあるものだ。——では、蠅螂男は光に弱いのか。彼らからの魔除け代わりに誰しも手鏡の一つでも持ち歩くべきなのか？——否。そんな話はどのように優れた生物学者も提唱していない。ただ、高度に梵子的な情報処理能力を持った彼らの超越的な『読み』を越えた全く突拍子もない行動と偶然が奇跡的に重なったことで、たまたま、その回路をすっかり狂わせることに成功したに過ぎない。それが骨身に染みているから、コマンゾルディアン・ヒーコンケは英雄扱いされたときに謙虚な苦笑いを浮かべてこう言うに留めたのだ——ああいう化け物に会ったときの良策ですって？——とんでもない、逃げるが勝ち、以外には私にはとても……——

ところで、彼らの自慢話を最も熱心に聴いている踏破家がいる。彼は虫者の男であり、この店の常連ではなかった。それどころか、この大陸の住人でもなく、遠く西の帝国から、ある仕事のためにやってきたのである。こんな明日も分からない職業をやっているのに郷里には子供もいたから、彼としてはしばらくのんびりと中央大陸の冒険を楽しもうという気分には到底なれない。うまい儲け話でも見つけて、さつさと船代を得て帰らなければならぬと考えていた。

この剣士の名前はロクザ・スバリと言つて、なかなかの色男といつてもよかつたし、実際、この酒場でも見知らぬ旅女に声をかけて今日はもう彼女とこれからの時間を過す予定にしていた。そんなことをやっているうちに四年前にしくじつてできてしまった子が息子のヨスナであつたが、その他、森の中で彼の浮ついた魂を利用して結実した虫者の子孫の芽はいくつあるのか、数えてみるのも骨が折れるほどである。そういった意味では、彼の一族としては優秀な種付け馬であつただろうが、そのやり方は少々節操がなさすぎて、かつての仲間からはかなり疎まれていた。俺のやることにケチつけるんじゃないかねえ、とマイペースではあつたが、子供までできてしまい、その指者の母親もその芋虫を押し付けて失踪。周囲の者は『バチがあつたんだ』としか思わなかつたし、これで彼の踏破家としての自由行動力は半減してしまつたから、その信頼低下も著しかつた。

彼は酒を飲んで帰つた夜、仕様がなく借りたぼろアパートで息子を殴りつけ、泣き

叫ぶ声で気づいた近所の通報によって刑務所行きとなった。まだ人の姿に脱皮しておらず、芋虫同然の息子は施設に入れられた。だが、出所後に意気揚々と、ようやく静かになったアパートの中で代わる代わるに女を抱いてみても、何の満足感も得られない。彼はこのときようやく気が付いたのであった。自分のあと数年続くかどうかもわからぬ人生の糧、意義こそは、あの子しかなかったのだ、と。

ロクザはかつて目標としていた転生の儀式を受ける資金集めをやめ、あの児虫を引き取って育てるために使おうと決意し、再び前の仲間達に懇願して踏破家業を再開しようとした。だが、彼の事件のせいで信用を失った仲間たちは生業を続けられずに四散しており、ようやく見つけた一人にも唾を吐きかけられてしまった。彼は仕方なく新しい仲間を見つかるまで一人で活動することにして、一人でもできる仕事として、ある商船の傭兵として雇われた。ただ乗っているだけ、戦えばいいだけ、のはずだった。：のだが、最近ではどの企業も雇用主も必死であるから、暇なときは荷物の片付けなどを兼用してやらなくてはいけないということで、そんなことはやったこともないロクザは度々失態を重ねて怒鳴られ、終いには『やってられっか!』と暴れて、同業者にボコボコにされたあげくに牢屋に入れられ、中央大陸に着くと同時に港に放り出されてしまったのだ。

「お話中失礼しますが、どうか、その遺跡の未探索区に関する情報を買ってくださいませんか」

コマンゾルディアン・ヒーコンケはこう話しかけてきたロクザ・スバリをまじまじと見つめた。彼をリーダーとして見定めたというよりも、他の三人は完全に酔いつぶれて机に突っ伏したり席から崩れ落ちていて、彼は店主に余計に金を払ってそれを許してもらっているような有様だったからだ。

「：いや、お若い方、売るようなものでもありません。喜んでお教えしますよ」

「じよ、おめ、コマ、ざけんな、冗談： じゃねえぞ、そういうのは売るんだよ、客より商売つげなくてどうするよ、おめえ：」メット・ジンガード・ガロツサがテーブルの上でまだ空のグラスを掴んだまま、半目を不気味に開けて、夢の中から語りかけるように言った。さすがのコマンゾルディアンもそのような情報が大変な価値を持つ業界であることは知っているが、それでもまだどこか踏破家業に染まっていない部分

が、こういった無垢な対応をさせたのである。それに、酒で気も大きくなっていた。彼は黙ったまま、ついに猫がぐったりしたのを見てとると、虫者の男に、「気にすることはありません、お仲間にもよろしく。きつと成功しますから」とに「やかに言った。

「いや、忝い。実は、それほどお金もなかったもので…」虫の戦士は『命拾いたな』
と思いつながら剣の柄にかけていた指をほどいた。「でも、仲間によろしく、という『依頼』の方は、仮にそのお返しとしたくとも、果たせそうにありません。一人旅なもの
ですから」

「ねえねえ… 早く寝ようよお。そんな爺さんほつといてさあ」世間知らずの田舎娘
のような、しかしよく見ると老けても見える年齢不詳の女が虫者の背後にいた。

「先に行つてくれ。大事な商談だ。うまくいったら君の愛らしくつぶらな瞳と同じ
くらい大きな宝石を買つてあげるから」

コマンズルディアンは思わず肩をすくめて、灰色の人工巻髪をぼりぼり搔いたが、
『商談』とやらを続けようとした。「二人旅でもない」と… 素人さんのようですからな」

「ええ、たまにああいった休息を取らないとどうにもなりませんからな、一人の寂し
さ、ふさぎの虫つてやつはね。そうではありませんか。四人でいたつて、わかりあえ
るモンでもないでしょう、仕事仲間なんぞとは。やはり体同士の癒着が、真の温もり
つてモンでせよ」

「さあ… 私はこの通り老人ですから」指者は、曲りなりにも尊い言葉であろう『真
の』などといった形容詞はそういう事例のために引かないで貰いたい、と文学趣味丸
出しで叫びたい衝動をなんとか抑制した。

「いやだなあ、私だつてもう十三歳だ。私達の一族では、もういつ死が訪れてもおか
しくない。老人だといえるのですよ、ある意味（虫者は、虫姿幼生期に振動行動が難しい代わり、多くの情報経路を体中や特
殊なセンサーで受ける。数センチの間に、5〜8歳ぐらいの精神年齢を
体とる。）」

「老いを知らぬ種族とは、うらやましい。さて、問題の場所はこちらです」コマンズ
ルディアン・ヒーコンケは適当なことを言いながらメットの道具袋を勝手にあげ、手
書きの地図を引きずり出した。「…でも、一人で行ける場所ではありませんよ」

「ええ、まあ、そうかもしれません。しかし、今すぐ息子に会いたいですよ。どう
しても。金が要るんです」ロクザ・スバリは根は素直な男であったから、気の良い老

人を前にして、自分でも驚くほど簡単に、喋らなくてもいいようなことを、身の上相談をするかのように打ち明けてしまった。

「ほう、息子さん」あの女ではなくて：いや、ああいったうちの誰かが母親ですな、と少年のような心を備えた老人は思ったが、それも胸のうちに秘めた。「では、危険も承知のうえで：しかし、失礼ながら、遺跡群の恐ろしさは：」

ロクザは女ををたらしこむ手管に関しては一級でも、今まで生き残ってきたのが不思議なほどに踏破家としては考えの浅い男であった。彼も多少は遺跡群の名声を聞き知ってはいたが、その噂も海を越えてわたるうちに、『ものすごいお宝があるらしい』といった都合のよい幻想だけになってしまっている。彼はそれをそのままに信じてしまふような男だったから、さつと行ってさつと採ってさつと帰ってくればいいのさ、とお気楽に考えていた。

「いや、十分に気をつけます。では、ありがたく。どうか、何と申されましたか： ああ、『蕃咲き誇る頃』さん、でしたね。あなたがたに私からも祝杯を。それではごきげんよう」彼はさつと立ち上がると、女の寢床へ去った。その前に、人のよすぎるコマンブルディアンが地図を渡そうとしたのを彼は丁重に断っていた。そこまで恩を受けなくても返しようがないかもしれない、生きていれば教割お渡しもできようが、と上機嫌で付け加えて。この虫者は記憶術については自信があったのだ。ところが指者の男は、それは全く冗談になっていないと感じて、知り合ったばかりの男を心配そうに暗いまなざしで見据えた。それはまるで、彼に取り付いていたが運命の悪戯で仕事を果たせなかつた死神の使者が、これ幸いと次のターゲットを見つけ、憑依してきたかのような——と、ロクザは感じ、不快に思ったから、もう一度『ごきげんよう』を繰り返して背を向けた。

突然ながら、こういった業界の一片をご紹介しようと思き始めた手前、興味本位で読者に問うてみたい。あなたは、踏破家業をやってみたいですか、と。確かにコマ達のような成功例もある。一ヶ月ほどで一年遊んで暮らせるだけの莫大な報酬や未知の冒険、英雄伝——しかしもし、ロクザ・スバリといったその影で露のように消え去っていく人間のあることを、知ったとしても——そう、彼は指者の老人が危惧したように、そのどの道短かつたであろう命をここで一気に絶たれることになる。それが彼に

とって自業自得だったのか、それでも踏破的人生に共感を抱けるかどうか――

「…けつ、偽善行為の結末がこのザマだ」斑猫の剣士が、すでに腐敗著しいロクザの死骸を斧で少し突付いた。頭部はなく、体の甲部だけが不釣り合いな光沢を残している。

「これでご満足か？ 俺はアンタと違ってただ働きなんぞ嫌だからな。こいつはもらっていくぜ」

コマンゾルディアン・ヒーコンケは、二週間前に知り合った虫の同業者の遺品から、メットとキルビルがガチャガチャとものを引きずり出しているのをとがめず、むしろ領いて奨励するような目で眺めた。ここは、遺跡群の外庭と呼ばれる辺りで、壊れた建物が広い荒地に散財し、中身にはあまり期待できなかったが、これ幸いと住み着いた邪悪な生物がそこを巢にしていたから、やはりその危険性には変わりなかった。

この死者は生前、帰り道で迷わないように目印をつけながら歩いていたので、その足取りを追うことはそれほど難しくなかった。

「俺、嫌だ。こんなの、死者の物盗る、よくない」

「爺さんが邪魔しなけりや今度はお前かよ！ ラクーン、いいからさっさと手伝え。

こんな無関係の野郎を、しかも俺たちの聖域を舐めてかかるような奴を、埋葬してやろうっていうんだから、これじゃ踏破家団じゃなくて偽善団体みたいだぜ、俺たちよ。そいつを否定するんだよ。それに、いただけるもんいただかねえと、こいつだって、なんのために死んだのかわかりやしねえじゃねえか」

うーむ、身勝手な論術ながら一理も二理もある、やはり彼は私にとっていつまでも先輩なのだ、とコマは半ば感心して腕組みした。それに、このリーダーにはまだ他にも自分達の得にはなりそうもない密かな野心があつて、それに反対するであろう猫に死者からの『恩を買わせよう』と考えていたから、この展開は実に好都合だったのである。だが、メットが指者のお目当ての品と思しきものを見つけ、ポイト傍らに投げたので、おもむろに動いて拾い上げた。それは、メモ用紙の束に小さく書き込んだ日記であった。相当詳細につけられていた。それはロクザ・スバリと会って感じた印象とは大分かけ離れていたから、コマンゾルディアンは首をかしば、顎を手でさすった。

「…この人、自分の死期を悟っていたんじゃないかしら。私のお祖母ちゃんもね、『そ

れでは明日逝きますので皆さんどうもお世話になりました』なんて言ったらしいわ」キルビール・サツカリが立ち上がって手帳を覗き込んだが、コマは『でもそのお婆様もきつと、うら若き乙女と大して見分けが付かなかったらうからややこしい』などと考えていたので、せつかくの珍しい彼女の的を得たフオローに何の返答もできなかった。

彼は船員に対する罵りなどが脈絡なく綴つてある辺りからゆっくりと読み進めていった。いつしかメットも手仕事をやめ、座りながら彼を見上げ、時折概説するように促した。

※ ○月十二日、晴れ：ようやく、ここと思われる場所に着いた。今日はもう遅いので、機材の前で眠ることにする。ここまで、かなりの数の怪物が出現したが、この誘いの石さえあればどうということはない。確かあと4つある。まだ大丈夫だ。

※ ○月十三日、不明：今日はやる気がしない。このまま寝ることにする。
※ ○月十四日、不明：今何時だろう。連中の話だと、合言葉を入力すればいいというはずだが、そのヒントになりそうなものは周囲にありそうにない。これは当てが外れた。帰るしかない。

「こいつ、俺たちがちゃんと探索してなかったとでも考えたのかよ。人馬鹿にするもほどがあるぜ」信仰を持たず、死者を生者同様に扱うことで敬意を示す流儀の猫が死骸に足で突つ込みを入れた。慌ててラクーンがたしなめるが、ぎろりと睨まれて黙ってしまふ。

※ ○月十五日、不明：あーあ。戦意喪失。少し寝ていこう。

※ ○月十六日、不明：（記入無し）

※ ○月十七日、曇り：今日は少し帰った。果報は寝て待てというから待ったが、一向に開く気配もないので。寄り道していこう

「その結果、ここにたどり着いたのね」とキルビールが言った。同種だからかもしれないが、少し同情的な声である。

※ ○月十八日、曇り：誘いの石があと一つになった。大分敵が多い。まともに当たったら勝ち目などない。あの爺の話をちゃんと聞いておけばよかった。女な

どにうつつを抜かしてきた俺の人生の……いや、これは俺の生き方だ。これによかったんだ。色々迷走して、おおよその位置関係がわかった。夜が明ければ、脱出もわけなからう。今回の冒険は良い体験になった。俺はもう引退して、金持ちの女でも真面目に愛したふりをして、あの女のように、息子を押し付けてあの世に行くとしよう。

※（日時不明）今日、巨大な手だけの、手だけの生物に！ 出会った。殺されるどころだった。まだあると思っていた石が、なかったのだ。単なる勘違いだった。どうして、こんな重要なことを勘違いできるのだろう。俺はやはりこの作業に向かないのだ。今まで知り合った中の、美人の選りすぐりの誰でもお前に差し出すし、連絡先も教えるから、と懇願してみようかと思っただが、その前に、奴が念話でわけのわからんことを話しかけてきた。よくよく聞いてみると、俺に頼みごとをしようというらしいのだ。いや、確かに俺様は踏破家だ、何でも任せてくれ、と、生きるために答えたのは良いが、果たしてうまく勤まるのだろうか。とりあえず、奴から前報酬で変な剣をもらった。これで当面はしのいでいくしかあるまい。

——手だけの生物の下手糞なスケッチを見なくても、それが自ら交渉してくるほどの高等な知能を持っている以上、おそらくこういった場所を好む『裳飛野（モト）』であることは、旅識能力の向上に熱心な読み手には造作もなくわかった。しかしここで、コマンズルディアンは眉間にしわ寄せてしまった。以降のページが全部白紙だったからである。彼はこの日か、翌日に死んでしまったのだろうか。いや、実はまだしばらく元気に生きていたのだが、書く余裕もなかったのだ。せっかくなので、少し物語の時間を戻し、彼の最後の冒険について語ってみることにしよう。

ロクザ・スバリは裳飛野——という生物名称は彼にはわからなかった——が自分を食わないかどうか心配だったが、外も怖いので、この奇妙な依頼者に守ってもらおうと考え、この生き物が家にしている瓦礫の中に身を隠して寝た。だがしばらくすると、腹の辺りを『指先』に少し齧られたようだった。幸い、胸当ての下に着込んでいた板金が砕けたものの、紙一重で助かった。もちろん慌てて飛び起きて、自分を殺せば依

頼はもちろん果たされないぞ、と強気で訴えた。

『殺す？ 何を言う、あんまり寝すぎているので起こそうと思ったのだ。ほら、もう昼だ』

手のひらに人のような五本指だけの姿だが、指先の一つ一つに別々の顔があり、それらが何やら蠢いてぺちやくちやと喋っており、およそその話を総合するところのことであった。コマンゾルディアンでなくとも、少々学識に長けたものなら、これらの顔が別々の自我と能力を持つことを思い出せるだろう。しかしこの化物には本当に悪気がないらしく、腹や頭、胸に穴が開けば即座に死ぬ、といった生物がいるということ自体に意識があまりないのである。

『ち、自分はどうせ何百年、下手すると何千、何万と生きてのうのと時を食うくせに、俺がちよつと寝ると文句を言いやがるのか』と彼は思ったが、その思考は相手に読まれたらしく、『彼ら』のおしゃべりが停止し、『どういう意味だ？』と言いたげな感じで五つの顔が彼を見下ろした。ロクザは慌てて身支度し、では行ってくるよ、と怪物の腹でもある巨大な手のひらに自分の小さな手を打ち合わせて出立した。

彼は半日かけて、指定されたほかの建物にたどり着いた。運良くここまで危険な生物に会うことはなく、何らかの小さな鬼人を軽く脅して追い払っただけだが、いつまでもここにいれば、それだけで命を失いかねない。ここで、「そういえば」とロクザは呟いた。依頼なんぞ果たさずにこのまま帰ればいいじゃないか、と考えたのだ。しかし彼は、『それじゃあ相手が化物とはいえ踏破家の名折れだし、約束も守れないのか、と、人類そのものを舐められてしまう』などと、らしくないことを考えてやめた。本当は、ああいった化物が所有するであろう凄いお室に興味があったのだが、これは偶然にも彼の延命に力を貸した判断である。裳飛野は超常の力で一帯を見渡しており、彼が裏切ったと判断されたが最後、すぐに追いかけて八つ裂きにしてしまったであろうから。

さて、虫の剣士は中に入って、口元に手を当て、『どうもすいません、お言付けを頼まれましてね』と言った。しかし、無反応だったので不用意に入っていく。

シャアッ！と妙な音がしたと思った瞬間、彼は松明を取り落として、飛び掛ってきた気配に組み敷かれ、しかもぎゅつと握られるような感じを思えた。「ちよ、待て！ 俺

は、アンタの仲間……だと思っけど、とにかく、メッセージを持ってきたんだ。話を、話しを聞いてくれ…

う？ うぎゃああー！ 彼を羽交い絞めにしたのは巨大な手ではなく、大蛇であったことを知って、ロクザは悲鳴を上げた。そのとき、また蛇の頭のようなものが暗闇からにゅつと彼の眼前に突き出たため、ロクザは情けなくも失禁して気を失った。

「おやおや、ミミズに食われるのか、最近の小人類は。ここまで来るとは、けっこう強い輩じゃあないのかい」これは面白い発言である。『観察』しているのは人の側ばかりではないのだろう。それはともかく、新しい敵のように思われたものは裳飛野の中指であり、指先の頭はキシヤーと鳴く蛇の頭に齧り付くと、そのままもぐもぐと吸い込むように喰い始めた。たちまち、他の指たちが俺にも寄越せと騒ぎ始め、胴にかぶりついて蛇を引きちぎったので、ロクザは全身骨折を免れて床に落ちた。指導的立場なのだろう、中指がすぐに男の頬を叩いて、目を覚まさせて用件を聞いた。

彼は体中の痛みに戦きつつがたがたと震えながら、たどたどしく話し始めた。先日出遭った裳飛野に依頼され、あんたを七十年前から愛してきたということを伝えてくれ、といわれたこと。もしOKなら、自分の家に来てほしいと言っていること——しかし、彼は詳しいことは知らなかったし、何よりもこの手全体が一つの意思を持つ生物と信じて疑わなかったので、次の質問に答えられないどころか、意味すらよくわからないのだった。

「ふむ、どなたかな。あの嫉妬深い菓指さんか、それとも太つちよの親指娘さんかね」しかし小さな男が力なく首を振るばかりなので、裳飛野は肩をすくめるような意味で、指全部を同じような間隔で揺すった。「まあ、いいでしょう。とにかく、私もお願いしたい。申し訳ないが、いずれの方であつても、その想いには答えられない、と伝えていただきたいのだ。私達にはすでに許婚があるのです。三本が適合してましてね。多数決で、あの人に決まっているんです」裳飛野に自分内民主主義が存在することをコマンゾルディアンなら面白く思つてメモを取るような場面だが、もちろんロクザにはそんな気も余裕もない。意味がわからないなりに、何かまずいことになりつつあるな、という感じがしてくる。

『最悪だ。このまま断りの返事なんかしてみろ、奴め、逆切れして八つ当たりで俺を

握りつぶしかねない。かといって、こいつの依頼も断れそうにないし…』

「大丈夫、私がこの場所で見つけた服を着ていきなさい。あなたにはびったりだ。私
の見立てだとかかなりの防御力があるのに、残念ながら私には扱えないものだ。これを
報酬としよう」

相変わらず思考が筒抜けか、とロクザはがっくりと首をうな垂れたが、悪い話でもない。いや、全てはうまくいきかけているようにすら思えた。これで、報酬が二倍になった。自分は、水女神の寵愛を受けているに違いない。こんな、普通なら出会い頭で争いあうしかないような怪物の信頼を受け、たったの一人で、一般的には難しくて手に入らないとされる凄い価値の代物を次々と手に入れることができるかもしれないのだ——その上さらに、相手はそれが三倍になるかもしれない提案をしてきたのだからたまらない。

「もう一つ、ちょうどいいのでお願いしたい。私のフィアンセに、そろそろ一緒に来りましょう、とお伝え願いたいのだ。彼の居場所は…」

ロクザは泥だらで憔悴しきった顔をほころばせ、お任せアレ、と叫ぶとすぐさま第三の裳飛野を探しに飛び出した。それは、すぐに見つかった。およそ1根度樹高が参考と距離の単位。1根度(コン)ほどしか離れていない。なぜ自分で伝えに行かないのだろう、といぶかしく感じた彼の思考に呼応して、相手が答えた。

「皆、恥ずかしいのですよ。あなたがた雑魚種族のように、惚れた腫れたのだと大騒ぎできるものでもありません、私達高等種族は」

『何が、手だけのくせに』という考えを持つだけで怒らせてしまいかねないので、ロクザは頭の中を意図的に真っ白にして、彼らへの友好的な意識だけを必死に繕った。もしもここで、彼の死骸の前に白紙の辺りを穴の開くほど見回しながら、この男に何が起ったかを空想している指の多い老人がこの話を聞いたとしたら、『そうか、このシャイな性質は、寿命が長すぎ、しかも雄しべ雌しべのようなものを自分の中に複数持ち、複雑で困難な生殖方法を取っている彼らには、自分達が増えすぎたり血縁が近くなりすぎたり、ただでさえ少ない住処を同種同士で争いあわないようにするために、ぜひとも必要な感覚なのだ』などと拳と手のひらを打ち合わせて喜んだことだろう。

「さて、私からもお願いしたい。どうにも、私の結婚相手は考えが浅いお嬢さんだ。愛らしいことこの上も無いが、いかがかね」

「はは、そ、その通りで」虫の踏破家は頭に浮かびそうな様々な想念を心の底に押し返し、早く話を終わらせてから考えることにしていた。

「何も、拒絶することは無いのだ。私達の子は、いくつかの指同士が多く合わさった方がうまくいく可能性が高まる。それでなくとも、出生率は低いというのに。この際三人で力を合わせればいい」この話しの意味するところは、著名な裳飛野研究者の出版した本にすら明確に書かれていないから、詳しく概説することは避けることにする。しかしロクザは本当に、研究者ならいくら金を積んでも得たいと思うような貴重極まる場面に遭遇しているということは断言できるのである。

さて、こういったわけで、彼は第三の化物をつれ、第二の化物に会い、元来た道を帰っていった。第一の裳飛野は他の男（女かもしれないし、こういった呼び方がそもそもナンセンスかもしれないが、便宜上）と一緒に恋の相手が来たことに驚いたように、しばらく悶絶するように体を震わせたが、二体の説得で何とか落ち着いた。三体は仲睦まじく並んでロクザに感謝し、全ての指を一度に折り曲げたので、化物化物と考えていた彼もさすがに誇らしい気分になり、『引退間際にきて、踏破家の面白みって奴を感じた気がするな』と思った。

すると、三体は指同士を絡めあいながらもぞもぞと動き出した。術でお礼の品でも出してくれるのかな、とロクザは期待して待っていたが、どうやら彼のことなど怪物達はもはやすっかり忘れてしまっているようだった。というのは、その痙攣的な動きや不気味で断続的な低いうなり声から次第に推測されてくることだが、どうやら彼らもう早速とその独特の交合を始めているらしいのであった。『うわ、こんなの見ても面白くもなんともねえよ』と彼は思い、「すいません、お取り込み中… その前に、約束の品をいただきたいんですが」と言った。

「アンタ、まだいたの。ああ、アタシ、おなかすいちやった」と、第一の裳飛野の人差し指が彼を文字通り指差した。

「そうだね、何か食べないと、続けられないよ。養分が必要だもの」と言ったのは第二の裳飛野で、第三の裳飛野が、「アレにしよう。不味そうだが、取り急ぎ無いよりマ

シだ」と、小指でロクザを示した。

「お、…恩知らずどもめ！」と一人ぼっちの踏破家は恐怖で激昂した声を上げながら、後ずさりし始めた。三体がずるずると近づいてくる。所詮は怪物、別の生物種——概念も、道徳も、社会性も、全く異なるのに、自分の考えや思い込みだけで接することは、どうであろうと偏見と呼ばれるしかないだろうから、彼の叫びは何か虚しい響きを漂わせている。彼の背に何らかの呪術がかけられたが、逃げ足だけには自信のあったロクザは、最後の最後まであきらめず、力の続く限り走り続け、いつしか脚が土に突き刺さったような気がして地に付したあとも、数m這いずって自分の死に場所までたどり着いたのだった。

「ねえコマ。この人、普通の方法で腐ったんじゃないわ。そりゃそうよね、こんな冬に、早すぎるもの」虫の術者が屍から梵子の残り香を感じ取ったようだった。

「腐敗の呪文ですか… 一体何があったのでしょうか。まあ、十中八九、探索中に裳飛野に襲われ、何とか逃げようとしたが、力尽きた、といったところか」コマンゾルデアイアン・ヒーコンケは額のところで創世主教の方法を真似て哀悼の印を切ると、手帳を閉じた。ラクーンが弔いの儀式の準備を始めている。指者はふと、手帳の裏にも文字が書かれていることに気づいた。それは、帝国での彼の住所と、『愛する息子。お前らしく、楽しく生きてください』というメッセージが丁寧な筆跡で書かれていた。彼はため息をついて目を閉じ、首を振ると、胸ポケットにそれを収めようとした。そのとき、じやり、じやり、と近くの床を何かが引きずってくる音が聞こえたので、緊張して周囲に目を走らせる。

物陰から、腹をすかせた手だけの怪物が三体くんずほぐれつで近づいてきていた。この種族はなかなか性交渉に入れないので、一度始まると終わるまで止められないらしいのだ。しかし、それには『養分』が必要なのである。せつかく見つけたあの男はもう食えないほどに腐ってしまったようだが、代わりに四匹に分裂しやがった、と怪物たちは涎をたらす。

「わかってんな、一二の三、だ。右手の穴倉に飛び込んで逃げるぞ」とメットが小声で言う。

「そうですね、正しい判断だ、踏破家として。この人のような、ダメ人間の判断じゃない」とコマは寂しそうに笑い、背は低いが屈強な猫男を見下ろした。「でも、私もまた、ダメ人間の一人なんです」指者の男は剣を構え、術に対して見えざる障壁を張る力のある指輪に念を送った。

「あっそうかい、じゃあオメエ一人でやりな。俺には無関係……なんて、できっかよ、ボケ老人！」と、言うが早いかメット・ジンガード・ガロツサは怪物に飛び掛り、敵の指を一本切り捨てた。相手にとつては体の一部でなく兄弟を殺されたようなもの、もちろん喚きながら激しく攻撃術法を繰り出してくる。しかし、互いが邪魔しあつてその命中率は低く、体操選手も真つ青の猫戦士の運動神経を止めることはできない。

「聞け、コマ。俺がやるのはな、そいつに同情したからじゃねえ、死んだのはそいつが悪い。侵入者は俺たち踏破家のほうなんだ。こんなことでいちいち恨みを持つてたら、世の中全部ひっくり返して、あらゆる生物を死滅させなくちゃならなくなる。

俺は、この化物を倒し、お宝を手に入れるんだよ。どんなチャンスも見逃さない、それがプロってもんだ。よくわからねえが、こいつら弱つてるみたいだぜ！ こんな化け物を我が手で倒せるんなぎ、今しかねえ」

そういう話は私の場合はいつでも君から聞けるからメモすることも無いが、あの地図を差し向かいに話していたときに、こういった心構えを彼の手帳に書いてやったら運命は変わっていたでしょうか、とコマは思った。もしそんなことができたなら、自分としては、『四人でいたつて、わかりあえるモンでもないでしょう、仕事仲間なんぞとは——と私も思いつつ、今まで、わかりあえなかったことは一度もなかったんですよ』と書き添えてやりたかったな、と考えた。そして、この虫者の遺志を受け、海を渡つてその息子に父の生き様を伝えるという次案についても、多くの悪態の最後には、やはり自分を見捨てずに、『これも世界を見る好機』と感じて仲間達がついてきてくれるであろうことも、理由を必要とせずに確信できるのだった。

「これだから私はいつまでたつても半人前だ」と『蕾咲き誇る頃』のリーダーはつぶやいて、敵の中でも特に主導的な立場にあるものから攻撃し、相手の混乱を深めるために臆せず前線に出た。——だからこそ、仲間の有難みを愉しむ事もできるんです。